

橈骨動脈血管造影検査を開始している。実際に当施設で行っている方法について若干の文献的考察を加えて報告する。

10 肝内病変の評価について PET が有効であった 1 例

小林 由夏・飯利 孝雄・大嶋 智子
横田 隆司・七條 公利

立川総合病院消化器内科

症例は 70 才，男性。胃角小弯に 2 型胃癌を認め、腹部 CT 上、肝門部門脈内に欠損像が見られた。長時間の安静仰臥位が困難で、他の検査による病変の血栓か腫瘍塞栓かの評価は不可能であった。病変の鑑別の目的に F-18 標識フルオロデオキシグルコース (FDG) を投与して体内の糖代謝を画像化するポジトロンエミッショントモグラフィ (PET) を行ったところ、同部位に高集積を認め、腫瘍塞栓であることが判明した。悪性腫瘍では正常組織に比較して糖代謝が亢進していることが知られており、FDG-PET は、肝臓および局所の病変の良、悪性の鑑別、手術前の病変の staging、腫瘍マーカーの上昇があるときの Screening について有用と考えられる。肝転移病変の評価においては、造影 CT に比して sensitivity, accuracy とともに高いという報告もある。今後臨床の場で、PET が機能的画像として活用されると思われる。

11 塩酸チクロピジンによる肝障害 — 薬剤師の視点から —

継田 雅美・畑 耕治郎*・五十嵐健太郎*
古川 浩一*・堺 勝之**・小田 弘隆**
新潟市民病院薬剤部
同 消化器科*
同 循環器科**

当院で最近経験した塩酸チクロピジンによる薬物性肝障害の 3 例を報告した。抗血小板剤である塩酸チクロピジンは一専門診療科が処方する特殊薬剤ではなく多数の診療科が処方する普及薬剤で

あり、過去再三の緊急安全性情報が出されているにもかかわらず重大な副作用が頻発している。副作用の発現部位 (造血器・肝臓) と時期 (約 2 ヶ月) がほぼ特定されているため、処方前に血算・肝機能をチェックし処方後 2 ヶ月は最低 2 週に 1 度の血液検査を行なうのは周知のごとくであるが、この検査体制でも副作用の早期発見には不十分な例がみられた。塩酸チクロピジンの副作用による肝障害は一旦発症すると重症・遷延化する例があるため、異常値が出現した場合グレード 1 であっても中止を検討する必要がある。塩酸チクロピジン投与に際しては厳密な処方適応および投与期間の可及的短縮化を考慮すべきであるとともに病診連携が推進される状況下から、紹介先へも塩酸チクロピジンにおける情報とコメントを提供すべきである。

12 B 型肝硬変に対する lamivudine 治療 — QOL 改善例を中心に —

畑 耕治郎・渡辺 和彦・阿部 行宏
相場 恒男・五十嵐健太郎・古川 浩一
何 汝朝・月岡 恵

新潟市民病院消化器科

Lamivudine 治療を 1 年以上継続した B 型肝硬変 7 例 (うち 1 例は非代償性) について臨床経過を検討した。検査値を治療前と 12 か月後で比較すると、ALT, アルブミン, 血小板数, AFP では有意差は認めなかったが、コリンエステラーゼ値は有意に上昇した。HBV-DNA (TMA 法) は 5 例が検出感度以下となり、1 例が低下し、1 例が YIDD 変異により再上昇した。HBe 抗原/抗体のセロコンバージョンは 1 例 (18 か月後) に認められた。

肝機能の flare up は治療終了例 5 例中 2 例 (1 例は YIDD) と継続例 2 例中 1 例 (YIDD) に認められたが、重症化には至らなかった。また 1 例において、肝外合併症である慢性腎炎によるネフローゼ症候群が改善し浮腫が消失した。非代償性の 1 例において、肝性脳症・胸水・腹水が改善し、PS の改善、栄養状態の改善、通院回数の減少など